



野鳥の 不思議解明 最前線 #73

文 植田睦之

© Japan Bird Research Association, 2011

さえずるウグイス *Cettia diphone*。穏やかな気持ちでさえずっている時期かな？ それとも攻撃的な気分？ 撮影●内田博

ウグイスは時と場合をわきまえている？

～ホトトギスが渡ってくる前と後で攻撃性を変えるウグイス～

うちのスタッフたち、よく些細なことで怒っています。「後ろから自転車にチリンチリンされた」「道を譲ったのに礼すら言わない」「ケアレスミスの指摘ばかりで本質的なことわかっていない」…。こんなことで怒ってて疲れないのかなあ？ もしかして、みんなが仕事を論文に全然まとめないの、つまらないことで怒っていて疲れているからなのかも…。

いつも怒っていると、ほかのことができなくなってしまうのは鳥も一緒です。オナガはカラスが巣に近づくと、怒って追い出します。カラスが卵やヒナを捕ろうとするからです。オナガにはツミの巣のまわりで繁殖するものもありますが、ツミのまわりではツミが代わりにカラスを追い出してくれるので、オナガは怒らない穏やかな生活をおくることができます。そうしたツミのまわりのオナガと比べると、普通のオナガは、怒っている分だけ給餌をすることができず、給餌回数も巣立ちヒナ数も少なくなることがわかっています (Ueta 1999)。このような「怒らなくてすむ」ケースでなくても、「怒るべき時」と「怒る必要のない時」を区別できるだけでも、だいぶ有意義な人生をおくれそうです。ウグイスがそんな生き方をしているそうだという研究が *Animal Behaviour* 誌の最新号に掲載されていたので紹介します。

この研究をしたのは国立科学博物館の濱尾章二さんです。ウグイスはホトトギスに托卵されます。托卵されないようにするためには、ウグイスはホトトギスが巣に近づいたら追い払う必要があります。濱尾さんは伊豆諸島の三宅島で、ホトトギスが渡来す

る前と後に、ウグイスにホトトギスの剥製を見せて、剥製に対するウグイスの反応を調べました。するとホトトギスの渡来前と比べ、渡来後に剥製への反応が強くなることがわかりました。ウグイスは、ホトトギスの渡来後の「怒るべき時期」に、ホトトギスに強く反応するようなのです。

ぼくは、住宅地の雑木林でツミの調査を毎年しています。この林のシジュウカラは、普段はキジバトが飛んでも特に反応を示しません。しかしツミが繁殖している年には、藪に飛び込んだり、警戒声を発するようになります。キジバトをツミと間違えて無駄走りしてしまうことが増えても、自分が捕食されないため、過敏に反応すべき年には反応しているのだと思われます。ウグイスの場合も同様なのでしょう。ウグイスはハトの剥製を見せてもホトトギスのようには反応せず、ハトとホトトギスを識別できているようです。ハト以外の種とホトトギスを間違えて無駄な労力を使わないですむよう、リスクの高い時期だけ反応するのでしょうか？ それとも早い時期は托卵される可能性が低いので、その時期のホトトギスに反応しても利が少なく、逆に捕食者に巣の位置を知らせてしまうことになるのであまり反応しないのでしょうか？ なぜ、時期によって反応を変えるのか、その仕組みが知りたいなあと思いました。

紹介した論文

Hamao, S. (2011) Seasonal increase in intensity of nest defence against Little Cuckoos by Japanese Bush Warblers. *Animal Behaviour* 82: 869-874.